町内の企業紹介

有限会社ドンカメ

「ゴミを宝に！」をキャッチフレーズに、生ゴミや牛ふん、草や落ち葉、稲わらなどから有機たい肥を製造している有限会社ドンカメを紹介します。

有限会社ドンカメは、１９９５年に農事組合法人として設立されました。１９９７年にはプラントを設置してたい肥製造を開始し、２００１年からは公共施設の生ゴミ回収を開始しました。そして２００３年に現在の有限会社ドンカメに。中のプラントは２００５年に新設されたものです。

▲小久保社長

■ゴミを宝に！

社長の小久保行雄さんは、昭和38年に農家の長男として稲毛田に生まれました。実家は米と梨を栽培していましたが化学肥料を多用する農業に疑問を抱き、一度就職しましたが、その後農業に立ち戻って就農し、土づくりを徹底して学ぼうと全国を巡りました。

小久保さんは「昔ながらの農業を学んで、落ち葉や刈草、わらやもみ殻、ふん尿や大豆かす・魚かすなど、身近に存在する有機資質源をたい肥に転嫁し田畑に還元していたことがわかりました」と話しました。その経験を踏まえ、小久保さんは「自然環境と調和し、土づくりを基本にした昔ながらの農」を手本に、地力の衰えた農地の再生と豊かな土をよみがえらせようと決意しました。そして、身近な資源である生ゴミをたい肥化する会社を作り、農地が喜び・作物が喜び・農家が喜び・商店が喜び・企業が喜び・消費者も喜ぶ、つまり「喜びが循環する環境の創出」を目指し日々努力を惜しまず活動を続けています。

現在は、従業員４人でプラントを稼働させ、年間約１、５００トンのたい肥を製造しています。畜ふんは畜産農家から毎日プラントに運ばれ、主な原料となる生ゴミは、町内外の企業から回収・処理を請け負い、町内の商店や一般家庭からも回収しています。プラントでは、これらの原料を約45日間かけて発酵させ、２カ月間たい肥舎で熟成し、やっと完成となります。さらにドンカメでは、熟成したたい肥をペレットに加工し使いやすくして供給する工夫をしています。

▲ペレットに加工されたたい肥

現在、国内だけでなく海外からも、ドンカメ方式のたい肥製造方法と考え方を学びに視察者が訪れます。また社長の小久保さんが全国各地に自ら赴き講演しているそうです。

▲生ゴミ回収

▲原材料の混合の様子

■小久保社長から町民の皆さんへ

ドンカメは、循環型社会「環の町芳賀」の取り組みの一つであるバイオマス部門を担っています。行政や企業、住民の皆さまのご理解とご協力で現在に至っています。先行きの見えない社会情勢の中ではありますが、少しでも環境の負荷を減らす努力をしてみましょう。燃えるごみを減らし、生ゴミをたい肥化することで地域内循環を確立し、たい肥を使った農作物のブランド化を進めていきます。今後もどうぞよろしくお願いします。

▲ドンカメたい肥について熱く語る小久保社長
（芳賀チャンネル取材中）

有限会社 ドンカメ

住　所	芳賀町稲毛田2066－3
従業員数	4人
電話番号	028 (677) 2284
事業内容	有機たい肥の製造、販売
工場敷地面積	4, 998㎡
施設概要	発酵プラント1棟、堆肥舎1棟、脱臭施設など
年間製造量	1, 500 t

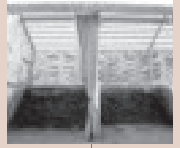
社名「ドンカメ」の由来

のろまな亀のこと。理由は、良い土を作るには、長い時間が必要であるから。幾多の試練が待ち受けているため、地道に一つ一つそれらの障害を乗り越えていく決意を表しています。

ドンカメたい肥ができるまで

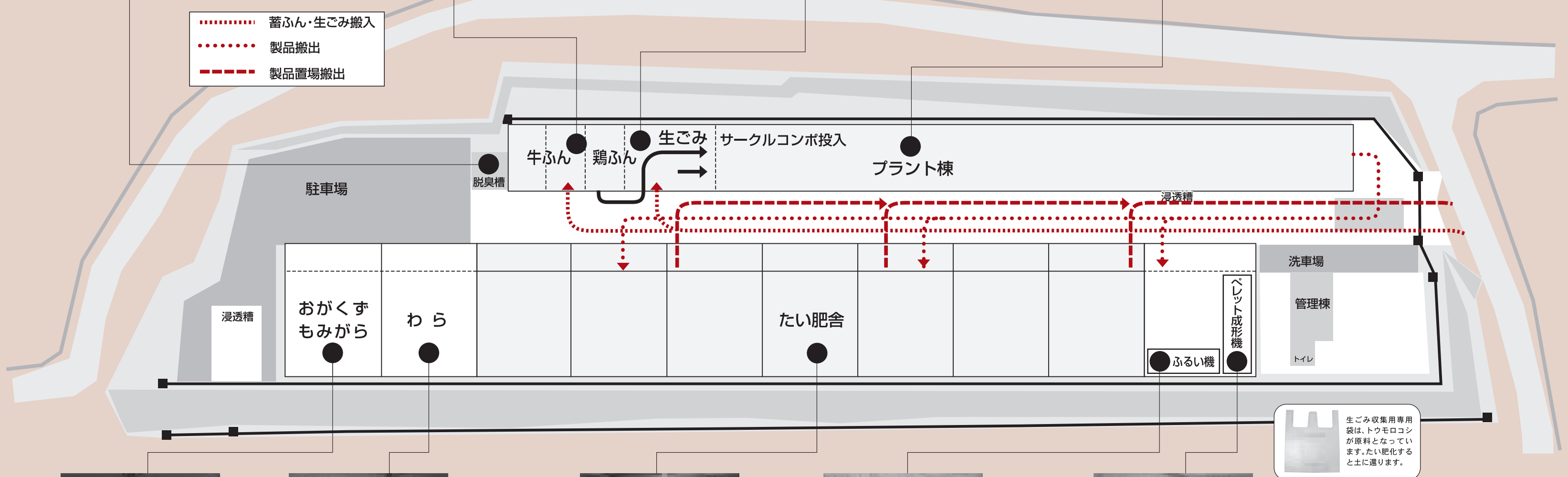
ドンカメでは生ゴミからたい肥を、さらにたい肥を使いやすいペレットに加工しています。プラントの中でどのようにたい肥が作られるのかを見てみましょう。

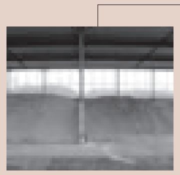
脱臭槽
おがくず式脱臭槽で24時間稼動します。


牛ふん・鶏ふんピット
農家が畜ふんを搬入し、一時保管します。

生ごみ混合ピット
町内公共施設、商店、企業、一般家庭から生ゴミを搬入。ホイールローダーで畜ふん・おがくずなどと混ぜ合わせ、プラントに投入します。

プラント棟
全長70m。撹拌機で切り返し作業を行います。約45日で排出されます。発酵熱は、80℃～50℃です。高温好気性の高速たい肥化施設です。




おがくず・もみがら
製材所、農家から調達。水分調整のために使用します。

草・わら・落葉・剪定枝チップ
シルバー人材センター、農家から搬入。水分調整のために使用します。

たい肥舎
ふるいが済んだたい肥を積んで約2カ月間熟成させます。

ふるい機
プラント棟から排出したたい肥を磁石とふるい機にかけ、異物を除去します。10mm以下の良質なたい肥を熟成させます。

ペレット成形機
熟成したたい肥をペレットに加工します。ペレット化することでたい肥の散布にかかる労力が軽減され、農家が使いやすくなります。